

出雲車両基地建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1981年3月

出雲市教育委員会

出雲車両基地建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1981年3月

出雲市教育委員会

序

このたび、出雲市神門・神西両地区に日本国有鉄道出雲車両基地が新設されることになり、岡山工事事務所からの委託を受けて予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

今回の調査で、出雲平野の中心部から少し離れた所にも貴重な埋蔵文化財があることが証明され、周辺部も踏査をすれば数多く新たに発見される可能性が強いことを示唆するものといえます。また、検出された遺構・遺物のなかには、県下において類例が少ないものも存在することをあわせ考えますと、本書は今後のこの方面にたいする研究に資するところ大であろうかと思われます。

本書を刊行するにあたり、ご指導いただきました島根県教育委員会をはじめ発掘調査を担当された調査員や地元の皆さま方に謝意を表するとともに、終始調査にご協力いただきました日本国有鉄道大阪工事局岡山工事事務所の関係各位に衷心より厚くお礼申しあげます。

昭和56年3月

出雲市教育委員会

教育長 清 水 寛

例　言

1. 本書は、伯備線・山陰線複線電化（米子～出雲市）に伴う出雲車両基地新設予定地内における埋蔵文化財の発掘調査記録である。
2. 調査は、日本国有鉄道大阪工事局岡山工事事務所の委託を受けて、出雲市教育委員会が昭和55年5月および昭和56年1月～2月に実施した。
3. 調査地点は、出雲市知井宮町間谷の間谷西遺跡と同東神西町の丁之内古墳、古垣内遺跡の3カ所である。調査は以下の体制で行った。

調査員　間谷西遺跡　西尾克己（島根県教育委員会文化課主事）

　　川上　稔（市立出雲図書館主事）

古垣内遺跡　川上　稔

丁之内古墳　川上　稔

調査補助員　石飛公士（島根大学教育学部学生）

　　遠藤浩己（　同　法文学部学生）

事務局　今岡　清（出雲市教育委員会社会教育課係長）

　　安井　堯（　同　主事）

4. 調査にあたっては、地元各位をはじめ日本国有鉄道岡山工事事務所の協力があり、また、島根県埋蔵文化財調査員 大国晴雄氏には助力を戴いた。

5. 間谷西遺跡出土の須恵器のケイ光X線分析は奈良教育大学教授三辻利一氏、古垣内遺跡出土の砥石の石材鑑定は松江北高等学校教諭三島欣一氏に依頼した。また、依頼に当っては平野芳英氏に便宜を頂いた。記して謝意を表する。

6. 本書の執筆、図面・図版作成は調査員の手によるが、遺物図版は有限会社井上松影堂にかかるものである。なお、図面作成の一部については島根大学法文学部学生赤沢秀則、片山泰輔両君の協力があった。

目 次

序

I 調査に至る経緯	1
II 位置と環境	3
III 間谷西遺跡の発掘調査	5
IV 丁之内古墳の発掘調査	13
V 古垣内遺跡の発掘調査	19



出雲電車基地の位置図

挿図目次

図1 出雲車両基地建設予定地内の遺跡分布図	1
図2 周辺の主要遺跡	3
図3 間谷西遺跡地形測量図	5
図4 間谷西遺跡遺構実測図	7
図5 間谷西遺跡出土土器実測図(1)	9
図6 間谷西遺跡出土土器実測図(2)	10
図7 丁之内古墳墳丘・遺構実測図	14
図8 丁之内古墳遺構実測図	15
図9 丁之内古墳出土鉄器実測図	16
図10 古垣内遺跡地形・遺構測量図	19
図11 古垣内遺跡遺構実測図	21
図12 古垣内遺跡出土遺物実測図	22

図版目次

図版I 間谷西遺跡遠景	
間谷西遺跡遺物出土状況	
図版II 筒形器台出土状況	
筒形器台	
図版III 筒形器台と甌(全体と部分)	
図版IV 坯・把手付塊・壺	
図版V 丁之内古墳遠景	
丁之内古墳主体部と鉄劍出土状況	
図版VI 丁之内古墳出土の鉄劍	
丁之内古墳出土の鉄劍(紺布の付着状況)	
丁之内古墳出土の鉄鎌	
図版VII 古垣内遺跡の主体部	
古垣内遺跡出土の遺物	

I 調査に至る経緯

多年の懸念であった伯備線・山陰線複線電化に伴う日本国有鉄道出雲車両基地が、出雲市街地の西郊、神門・神西両地区にまたがる地域に新設されることになり、日本国有鉄道大阪工事局岡山工事事務所（以下、岡山工事事務所とする）は、地元の出雲市教育委員会へ埋蔵文化財包含地の分布調査を依頼した。

当該地には周知の遺跡はなかったが、埋蔵文化財が存在する可能性が極めて強く、出雲市教育委員会は昭和55年4月16日にトレンチによる試掘調査を2カ所において実施した。その内の1カ所間谷丘陵の東側突端頂部（出雲市知井宮町2517-3）において遺構および遺物を確認したので、事前に発掘調査を行うこととなった。

昭和55年4月24日付で岡山工事事務所から出雲市教育委員会に、出雲車両基地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査についての依頼があり、これに基づいて関係者が協議し、5月1日に埋蔵文化財発掘調査委託契約書を両者で締結した。

発掘調査は昭和55年5月1日から4日までの4日間に亘って実施し、小規模であったが以下に報告する成果を得ることができた。



図1 出雲車両基地建設予定地内の遺跡分布図（A～Iの地点は試掘した場所である）

一方、神西地区については用地折衝が難航し、立入り調査も遅れていたが⁶、地元の了解が取り付けられたため、再度岡山工事事務所から分布調査の依頼があった。出雲市教育委員会は知井宮地区と同様に11月27日にまず踏査を実施し、埋蔵文化財の可能性のある8地点を確認し、昭和56年1月7日・8日の両日に8地点の試掘を行った。その結果、近世～近代の墓1カ所と古代の遺跡2カ所を確認したので、昭和56年1月14日に埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結し、昭和56年1月16日から2月16日まで遺跡2カ所について発掘調査を実施した。

II 位置と環境

電車基地建設が予定されている出雲市知井宮町間谷から東神西町東組にかけての地域は出雲平野の西南部にあたり、現在西方2kmには神西湖が、北方1.5kmには西流する神戸川が位置する。この一帯は第三紀に形成された標高20~30mの低丘陵が平野に張り出す地域で、北方全面には平地が開け、南方背後には中国山地へ続く嶺が迫る。

さて、出雲市知井宮町から篠川郡湖陵町にかけては中世まで神門水海と呼ばれていた潟湖に多く蔽われていた（注1）。そのため、古代において耕地は湖付近の湿田や短い河川によってできた谷合の水田に限られ、生産量も少なかったと推定される。

この地域で最も古い遺跡には、弥生時代後半の貝塚として注目されている知井宮町多聞院遺跡がある。弥生時代中期後半から古墳時代初頭に當まれて、土器、石器、鐵器、骨角器等多くの遺物が出土している（注2）。また、同時代の遺跡としては石斧出土地の間谷遺跡がある。



図2 周辺の主要遺跡 (1:7,500)

1. 間谷西遺跡
2. 古垣内遺跡
3. 丁之内古墳
4. 間谷古墳
5. 浅柄古墳群
6. 北光寺古墳
7. 深谷横穴群
8. 福知寺横穴群
9. 小浜横穴群
10. 多聞院遺跡
11. 神待山横穴群
12. 宝塚古墳
13. 紗蓮寺山古墳
14. 放レ山古墳
15. 井上横穴群
16. 小坂古墳
17. 刈山古墳群
18. 天神遺跡
19. 大念寺古墳
20. 上塙治茶山古墳
21. 地藏山古墳
22. 半分古墳
23. 上塙治横穴群
24. 神門寺境内庵寺

古墳時代の遺跡には古墳と横穴が知られている。古墳では東神西町所在の全長60mの前方後円墳である北光寺古墳（前方部に竪穴式石室を有するが詳細不明）以外は小規模で、現在のところ知井宮町浅柄古墳群（3基より構成）（注3）と間谷古墳（内部主体不明）、および東神西町の東組古墳（径約5mの円墳）が確認されている。これらの古墳はおおよそ中期から後期前半に属し、横穴が出現する以前と考えられる。

古墳と対照的に多いのが横穴である。県道多伎・江南・山陰線と国道9号線にはさまれた出雲市知井宮町、神門町、東神西町の低丘陵には12支群60穴以上の横穴が開口している（注4）。その時期はおおよそ後期後半に属する。

一方、この地域の東に位置する出雲市今市町から下志町一帯の丘陵縁辺部には多数の遺跡が分布している（注5）。なかでも後期後半に相前後して築かれた大規模な古墳がよく知られ、出雲西部の古墳文化の中心をなしている。著名な古墳には今市町大念寺古墳（全長84mの前方後円墳、横穴式石室、家形石棺2）、上塙治町上塙治染山古墳（径約40mの円墳、横穴式石室、家形石棺2）と、地藏山古墳（横穴式石室、家形石棺1、石床1）、下志町宝塚古墳（横穴式石室、家形石棺1）があり、国の史跡に指定されている。

なお、律令時代の知井宮町から東神西町一帯は「出雲國風土記」（733年編纂）によると神門郡滑狭郷に属し、この地域は神門郡家や狭結駅が設置された古志郷の西に隣接する。（注6）

注1. 「出雲國風土記」には神門水海は周囲35里74步（18.84km）と記録されている。

注2. 大塚初重「島根県出雲市知井宮遺跡の調査」（『考古学集刊』第2巻第1号、1963）による。

注3. 1号墳については、池田満雄「浅柄古墳」（『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅳ集、島根県教育委員会、1972）がある。

また、1号墳付近からは後期初頭に位置づけられる須恵器と土師器が出土している。

注4. 著名な横穴群としては、出雲市知井宮町福知寺横穴群や同東神西町小浜横穴群が挙げられる。

注5. 「出雲・上塙治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告」（建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会、1980）を参照。

注6. 「正倉院文書」の「出雲國大稅賦給帳名帳」（739年作製）によると滑狭郷には阿瀬、池井の里が知られ、現在の簸川郡湖陵町姫谷と出雲市知井宮町はその道称である。

III 間谷西遺跡の発掘調査

1. 調査の経緯

2. 遺構

3. 遺物

4. 小結

1. 調査の経過

調査は、昭和55年5月1日から4日までの4日間に亘って実施した。以下、調査の経過を日を追って概述する。

5月1日（木）

調査区内地内の立木伐採や下草の除去を行なう。25cmセンターで地形測量を実施する。

5月2日（金）

1.5m×7mのトレンチを東西方面に設定し、既に存在が知れていた溝状の遺構の検出と他の遺構の有無を確認する。

調査と併行して西方50mに位置する尾根上の平坦地に3×4mのグリッドを設定して調査を行う。しかし、遺構、遺物は発見しえなかった。

5月3日（土）

午前中は遺構の全貌を確認するための調査を継続。溝状遺構以外は検出できず、午後からは遺構の実測と写真撮影を行う。

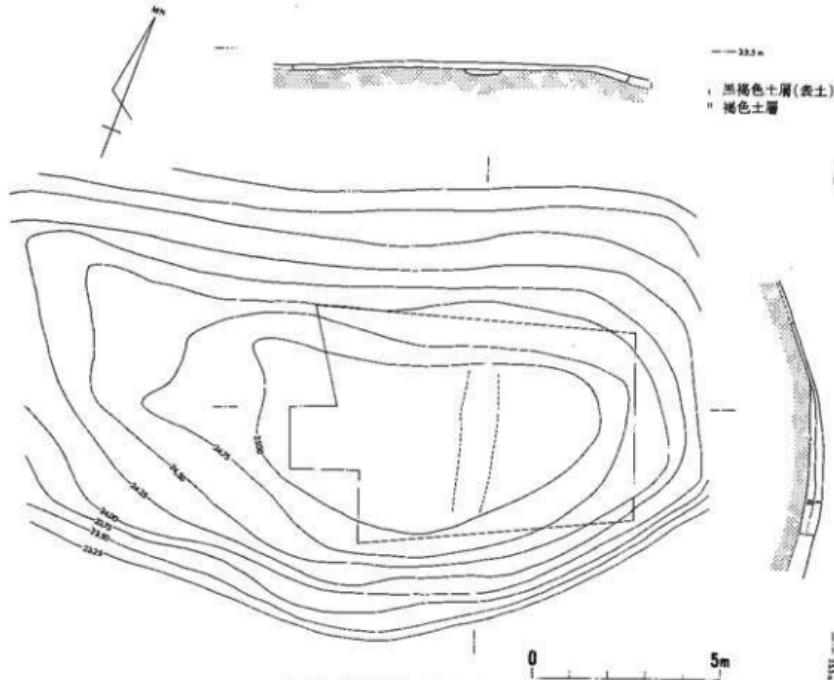


図3 間谷西遺跡地形測量図

5月4日(日)

前日に残した遺構の実測と平板測量を実施し、全ての日程を終了する。

2. 遺 勉 構

遺跡は東西にやや細長い小丘の先端部に位置し、現況では50m²ほどの平坦地が認められる。この平坦地の周囲は東側と南側とが急な崖となる。一方、北側は緩やかな斜面であり、西側は尾根状を呈し、幅1.5mの小径が残る。

調査の結果、平坦地の東寄りの部分から尾根に直交する全長7m、幅0.7~1.0mの溝状遺構が検出された。その両端のうち、南側は深く落ちる崖で切られ、遺物の出土状況等より以前はさらに伸びていたと考えられる。遺構はほぼ垂直に掘られ、深さは中央部で15cm前後と浅く、おそらく上端はもう少し高かったと推定される。また、床面は北側においては地山の傾斜に沿って緩やかにカーブしており、中央部より20~40cm低くなる。

土層は表土である厚さ20cmの黒褐色腐蝕土層を剥ぐと、直接白色粘土を含む黄褐色土層の地山にあたる。溝は地山を堀り、溝内には緻密な褐色土がやく20~30cmの厚さで存在する。このように表土下は直接地山となり、床も極めて浅く、また、遺物の一部が露出するのはこの遺跡付近の土砂流失の激しさをよく示している。

遺物の出土は溝状遺構内に限られ、南側から壺部に倒立した甌が溶着した筒形器台2、把手付壺1、蓋壺の身1、破碎された壺1、同じく破碎された甌1がほぼ等間隔にあるのが認められた。すなわち、南端には胴部の中途から脚を残す筒形器台が、また、1mの間隔で脚部を欠く同様の器台が床面に据えられ、これより1m北には蓋壺の身と把手付の壺が床より10cm浮いた状況で置かれていた。さらに1~1.5m離れた位置に1個体分の壺と甌の破片が散乱し、壺は1m四方に重なり合った状態で発見されたが、甌は松の根に挟まれていたため、その詳細を知ることはできなかった。

以上の様に、細長い溝状遺構内より各種の須恵器が等間隔で発見された事は、この遺跡の性格を知る手掛りとなる。しかし、島根県下において類例は全く知られていない。

3. 遺 物

遺物には溝状遺構から発見された土師器と須恵器がある。

土師器は細片が數個出土しているが、器種や形態および大きさは不明である。器表に赤色塗彩をもつ破片も認められる。須恵器には蓋壺身1、把手付壺1、甌2、筒形器台2、壺1、甌1が出土している(注1)。

蓋壺身(図5-1)

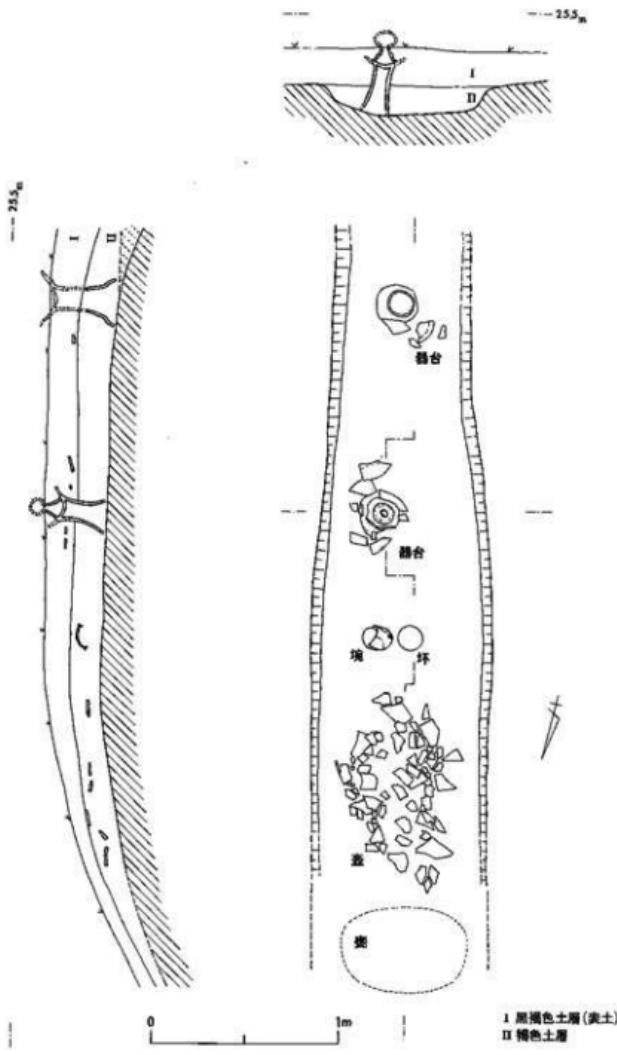


図4 間谷西遺跡遺構実測図

口径は11.0cm、器高4.0cmの完形品であり、口縁部のたちあがりは内傾し、端部はやや鋭い。受部は外方に開き、端部は丸く終り、底部は平たく、体部は斜めに立ち上がる。

底部外面はヘラ削り、内面は不定方向のナデで調整し、口縁部から体部にかけては回転ナデを施す。なお、胎土は密で焼成は良好、色調は灰褐色を呈すが、底部から体部の表面は自然釉のため緑褐色となる。

把手付塊（図5-2）

口径は11.8cm、器高は8.4cmの完形品であり、底部から体部にかけてはやや外開き気味である。把手は接合部の径2.5cmを測り、体部の中途に貼付けられているが、中途以上は欠損し詳細は不明である。

底部は全面へラ削りが施され、他の部分は回転ナデ調整されている。なお、胎土は密であるが、焼成は悪く灰褐色を呈す。

跋（図5-3）

器台5に溶着していた跋で、肩部以上を残す。形態は跋（4）と同様に頸部が長く、口縁部が大きく開くが、肩部はかなり張るタイプである。頸部には2条の凹線をもつが、文様は有しない。調整は肩部にカキ目を施す以外は回転ナデで仕上げる。

なお、胎土は密で焼成は良く、肩部は暗青色を呈す。頸部以上には緑褐色の自然釉がかかり、頸部から口縁部は焼成時の歪みが著しい。

跋（図5-4）

器台6の環部に溶着していた跋で胸部の一部を欠き、口径は14.3cm、器高は16.5cmを測る。

形態は底部から肩部にかけて丸く、細く長い頸部さらに大きく開く口縁部をもつ。頸部の中途に2条の凹線が継り、口縁部との境には三角形の凸帯をつくり出し、その中间に数十本も斜め方向に「ノ」の字状のヘラ描文を施す。また、腹部の中途には径2cmの小孔を穿つ。調整は小孔より底部にかけてナデ、肩部から頸部にかけてカキ目調整をさらに他の部分は回転ナデで仕上げる。

なお、胎土は密で焼成は良く、表面には自然釉がかかり緑褐色を呈す。

器台（図5-5）

脚部を欠損した筒形器台である。復元すると器台は約34cmとなるかなりの大形品で、環部に倒立状態の跋が溶着しており、それを含めると46cmとなる。環部は鉢状に大きく外反し、口径は28cmを測る。胴部は筒状をなし、胴部から脚部にかけては「ハ」の字状に開き、胴部の最小径は10cm、脚径は24cm前後と推定される。胴部表面には1~2条の凹線が四段

に繰らされ、その間3段に各4個の三角形の透しを、胴部上段に長方形の透しを二段各4個もつ。調整は环部の上部が細いハケ調整の後ナデで仕上げている。环部との接合部附近は平行タタキ目が残る。

なお、胎土は密で焼成は良く、暗褐色を呈す。

器台（図5-6）

腹が溶着した筒形器台であるが、腹が分離し現存する部分も环部と脚部に限られている。その形態は前述の器台とほぼ同様で、环部は外反し、脚部は「ハ」の字状に開く。口径27cm、脚径約26cmを測る。さらに、胴部から脚部にかけては2条の凹線で区切られた各方面に

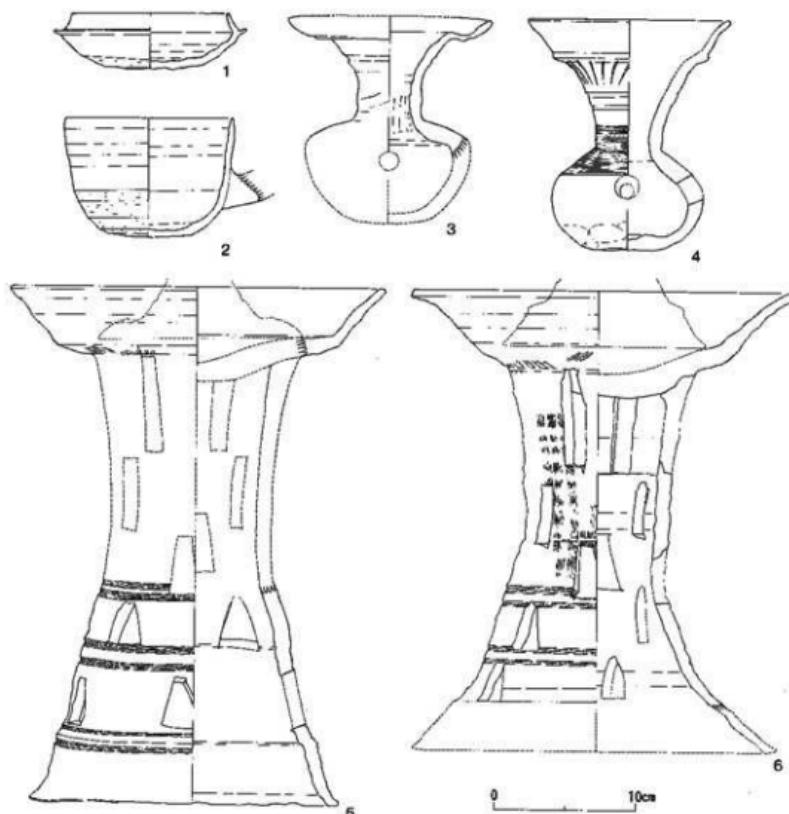


図5 間谷西遺跡出土土器実測図(1)

三角形の透しを4個づつもつ。調整は、現存する大部分が回転ナデで、肩部と脚部の接合部付近には平行タタキ目が残る。

なお、胎土は密で焼成はよく、暗青色を呈す。脚部には焼成時の歪みが認められる。

甕(図6-1)

口径26.0cmの小形の甕であるが、破片が小さく復元できなかった。口縁部端は肥厚し、やや丸味をおびる。調整は、口縁部が回転ナデ、肩部以下の内面はナデによりタタキ目が消され、外面には平行タタキ目が残る。

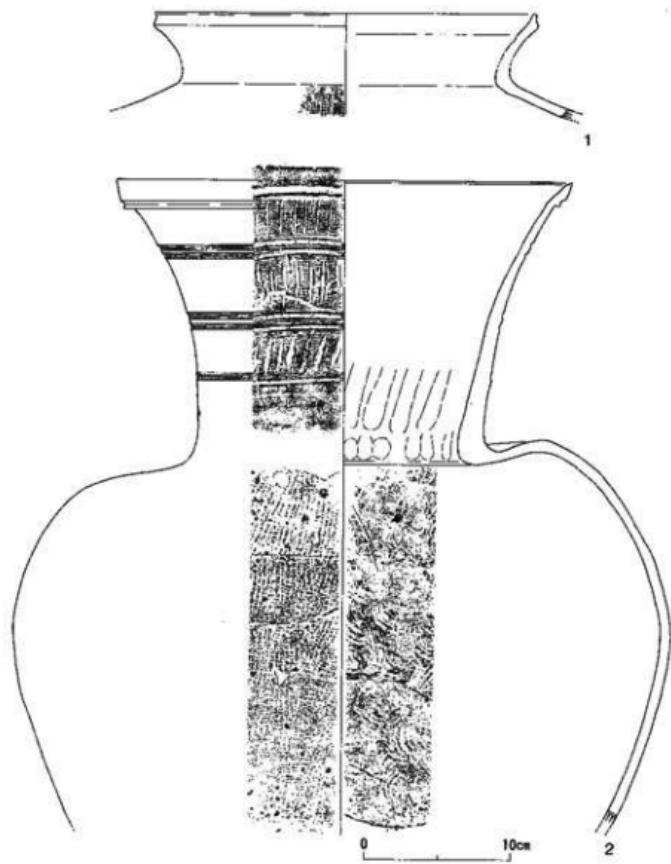


図6 間谷西遺跡出土土器実測図(2)

なお、胎土は密であるが、焼成が懸く淡褐色を呈す。

壺(図6-2)

口径33cm、胴部最大径50cmを測る大形の壺であり、口頸部はやや外傾気味に立ち上がる。端部下方に断面三角形の凸帯をもち、端部は肥厚し、内面には段が認められる。口頸部外面はカキ目調整後、1~2条の凹線が3段に繞らされ、その間に「ノ」の字状沈線文が施されている。肩部はやや張り、内面は同心円タタキ目の後ナデが施され、外面には平行タタキ目が残る。

なお、胎土は密で焼成は良く、暗青色を呈す。肩部以下は焼成時の歪みが著しい。

4. 小 結

調査によって検出された遺構は丘陵に直交する全長7m以上、幅約1mの浅く細長い溝であり、埴輪部内部に沿した実用性の薄い器台や故意に破壊された壺、甕などの須恵器が等間隔で置かれた極めて特殊なものである。

この種の遺構は管見の限りでは島根県下には類例がなく、埋葬儀礼に伴うものか、あるいは埋葬以外の目的で使用した土器を廃棄した溝であるのかは現段階では判断し難い。ただ、前述した如く、床面が弧状に湾曲し、欠損した土器が多く認められるのは埋葬主体としての土壤の可能性は薄いが、土器の大部分を須恵器(注1)が占め、器台や把手付甕等の器種を含む点は古墳の副葬品に共通する。今後の資料増加を待って性格を検討したい。

次に、出土した須恵器およびそれを手掛りに遺跡の時期について触れてみよう。本遺跡から出土した須恵器の量は少ない。しかし、器種的には豊富で、一度に埋納されているので一括資料としての価値をもつ。さらに、山陰において出土例の稀な筒形器台を共伴している点も見逃せない。

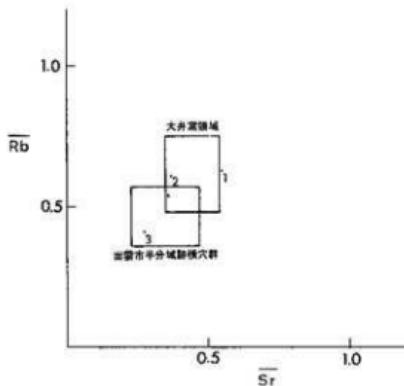
また、時期は蓋壺の身から山陰の須恵器編年における第Ⅲ期の範疇に含まれる(注2)。それは埴輪の頭部が長く、口縁部にかけて大きく外反することとも矛盾しない。本遺跡の器台には波状文等の装飾をもたず、全体にシャープさを欠くなどは、器台が姿を消す時期のものと共通する(注3)。しかし、壺は口唇部内面に微かな段を有し、壺と甕の体部内面のタタキ目を一部あるいは全面をナデによって消す調整を施す。この手法等は古式の須恵器によく使われており、古い手法を用いようとする意図が窺われ、遺跡の特殊性とともに注目される。この様に、本遺跡出土の土器は出雲地方における古墳時代須恵器の編年を再検討する上で貴重な資料を提供するものといえよう。(西尾克己)

注1 須恵器のケイ光X線分析は奈良教育大学教授三辻利一氏に依頼した。その結果、以下の様なデーターが得られている。

1(壺、図6-2)と2(器台、図5-6)の産地は大井窯(松江市大井町所在)周辺に求められよう。ただし、3(甕、図6-1)は半分城跡横穴群(出雲市上塩治町所在、上塩治横穴群の支群)出土の須恵器と類似する。(以上、三辻氏による。)

なお、島根県内における窯跡出土の須恵器の胎土分析は、現在のところ大井周辺の窯に限られており、今後、他の窯跡資料が増加すれば間谷西道跡出土の須恵器の生産地も確定するはずである。

Rbはルビジウム、Srはストロンチウムである。



注2. 山本 清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』所収、1971)による。

注3. 財団法人大阪文化財センター『陶邑』III -大阪府文化財調査報告書第30輯-(1980)。
なお、田辺昭三「陶邑の変貌」(『古代の日本』5所収、角川書店、1970)によると、
陶邑古窯址群(大阪府堺市、和泉市および南河内郡狹山町に所在)において器台は
七世紀はじめに姿を消すという。



間谷西遺跡遠景（東から）



間谷西遺跡遺物出土状況（北から）



筒形器台出土状況（東から）



筒形器台（図5-5）

全体



部分



筒形器台（図5-6）と壠（図5-4）

壺(図5-1)



把手付壺(図5-2)



壺(図6-2)



IV ちょうのうち 丁之内古墳の発掘調査

1. 調査の経緯

2. 墳丘

3. 内部主体

4. 遺物

5. 小結

1. 調査の経緯

昭和56年1月8日に、 $1.5 \times 6\text{ m}$ のトレンチを設定して試掘調査を行なった結果、地表から15cmの深さで10本が1束となった鉄錆が出土し、付近にも落ち込みを確認したため発掘調査をすることになった地点である。地形や遺物からみて小規模な古墳と考えられる。以下、日を追って概述する。

1月16日（金）

古墳およびその周辺の立木伐採等を開始する。それと併行して、基準杭を墳頂部に設定し、25cmセンターで地形測量を実施する。

1月19日（月）

墳頂部の基準杭を中心として十字にセクション・ベルトを残し、墳頂部平坦面から発掘に着手する。

1月21日（水）

墳頂部の埋葬主体部はセクション・ベルトにかかるため精査は後回しにして墳丘斜面の排土をする。併行してセクション・ベルトの脇にサブトレンチを設定し、地山まで掘り下げる。

1月23日（金）

セクションの写真と図面を作製する。セクション・ベルトの除去にも着手する。

1月27日（火）

丁之内古墳のすぐ西側の地点の発掘にも着手したが、調査の結果、古墳でないことが判明した。それと併行して、丁之内古墳の埋葬主体部の精査を開始する。

1月29日（木）

埋葬主体部は、幅30~50cm、長さ1.8mの土壙であることが判り、鉄剣一振が出土する。午後から図面の作製を手懸け、夕方、遺物を取り上げる。

2月3日（火）

測量と古墳の写真撮影を行い、発掘調査を完了する。

2. 墳丘

南から派生した小支丘の突端頂部に古墳は存在する。孤立丘最高所（標高23m）の尾根の分岐点に築成されており、前面には沖積平野がかなり広く見渡せる絶佳の地にある。

墳形は径10mの方墳と推定されるが、墳縄が判つきりと肉眼でも確認できるのは墳丘南側の尾根上だけであり、周溝などの外部施設がないために断定はできない。特に、北側は崩れていて、墳頂部から墳丘斜面が急激に下り崖状を呈するため墳縄は確認できなかった。

墳丘の高さは、西側では約1mであるが、東側の高い方では20cm程度低い。地形的制約のために幅狭い尾根の余地を残さないように築成されており、尾根筋での切り離しとしての構造施設は確認できなかった。

墳丘は地山を加工したうえで若干の盛土を施して墳丘を形成し、層序は上から黒褐色土層（表土層）、褐色土層、地山、明褐色土層の順となっている。墳頂部の東西3.5m、南北2.5mの区域が平坦に削平され、中央部に埋葬主体としての土塙が主軸をE-Wにして設けられている。墳丘の外部施設としての埴輪や砾石は全く認められない。

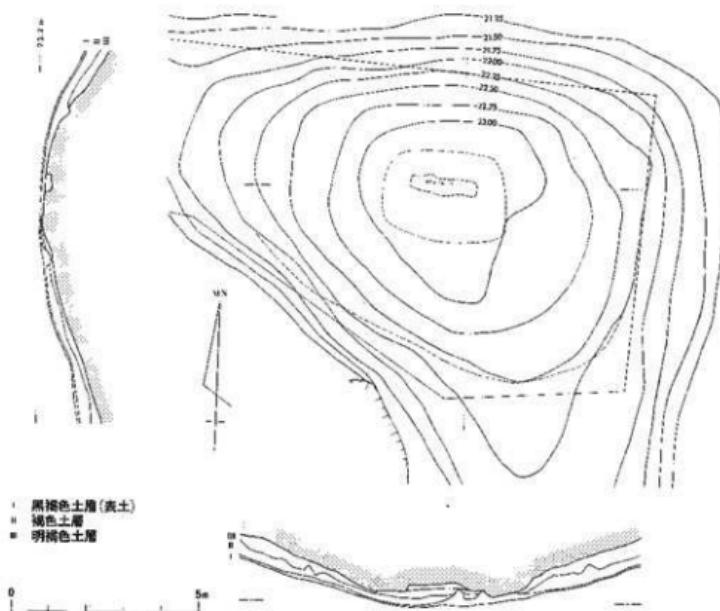


図7 丁之内古墳墳丘・遺構実測図

3. 内部主体

内部主体は墳央部の平坦面にあり、東西を主軸とする長径1.8m、短径0.3~0.6mのほぼ長方形を呈する土壙で、おそらく木棺直葬であったと推定されるが棺材は全く検出できなかった。

土壙は地山面からの深さは10~20cmで浅いが、古墳発見の契機となった鉄鎌束が地山より少し高位であったことを併せ考えると、土壙の深さはもう少しあったものと思われるが、木根が多く土壙の切込み面の確認はできなかった。

土壙は素掘りで段のない簡単なものであり、両端に比べると中央部がやや幅広くなっているが、壁面が崩れたためと考えられ本来は長方形を呈していたものであろう。土壙の底部は両端よりも中央部がかすかに深み東側が西側よりも若干高くなっているので東向きの埋葬頭位だったかも知れない。

主体部の遺物としては、鉄剣一振と鉄鎌の束が出土している。鉄剣は土壙の北寄りに刃先を西にして主軸方向に置かれていた。試掘調査の段階で検出された鉄鎌束はその位置からして土壙上部とみられ、棺外の遺物であったと推定される。土器の副葬は認められなかつた。

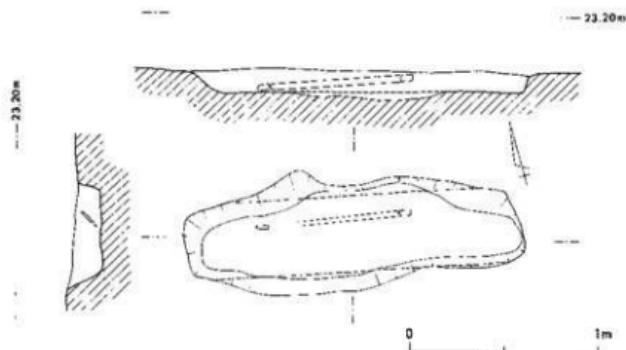


図8 丁之内古墳構造実測図

4. 遺 物

鉄剣（図9-1） 内部主体である土壙のやや北寄りの位置に切先を西にして主軸方向に置かれていた。切先部は壙底には接しているが、茎部は壙底から約20cm高位にあり、さらには剣身が横にならずに刃部を立てた状態にあったことからみて、本来、鉄剣は棺上に据え置かれていたものと推定される。保存状態は良好とはいはず、錆化が著しいうえに剣身が多折しているが、ほぼ完形は推定できる状態にはある。剣身の現存長は86cmで、身の両側に刃をもち、刃渡りは68cm、身幅は4cmで茎が20cmとなっている。茎は断面が長方形で茎端の幅は2.5cmである。目釘穴らしい小穴が茎端から4.8cmの位置に穿たれているようだが、錆のために判然とはしない。

また、この鉄剣は紺布で幾重にも巻かれて副葬されていたらしく、茎から刃先にいたる数カ所にその圧痕が認められ、茎部には特に明瞭に窺うことができる。したがって、鞘や木柄は装着していないかった。

鉄鎌（図9-2） 鉄鎌が検出された地点は、土壙内の最上部で、本棺の上に置かれていたと推定される。10本の鉄鎌が鎌着して1束となって刃部を東向に出土した。10本の鉄鎌は孰れも欠失して完形は全くなく、刃部も1本しか判明するものがなかった。全部が同一種であったかどうかは判らないが、少くとも1本は尖根式有茎無逆刺両刃鉄鎌で、現存長3.7cm、刃部長2.5cmを測り、茎は5×4mmの長方形断面を呈し1.5cm残存している。その他の鉄鎌は茎だけを残し、5cm内外を測る。

5. 小 結

調査の結果、横穴式石室を有する後期古墳の卓越する西部出雲平野にあっては異質な古墳といえる。古墳は径10mの小規模古墳ではあるが、内部主体が地山を掘り込んだ土壙であり、棺材は検出できなかつたものの形態からして木棺直葬の可能性が強い。さらに、出土遺物も貧弱で、鉄剣のほかには鉄鎌しかなく、埴丘や埴棺からは何らの遺物も発見できなかつた。

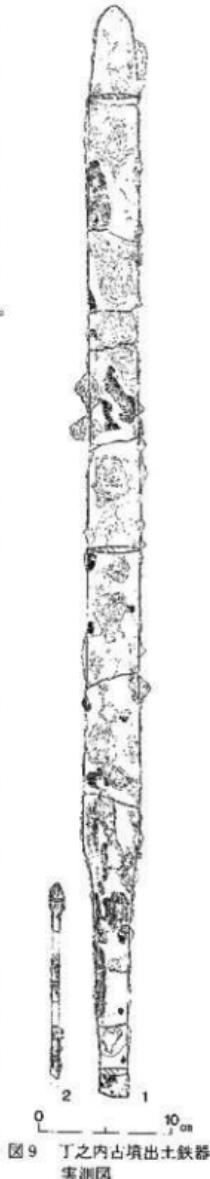


図9 丁之内古墳出土鉄器
実測図

丁之内古墳の墳形は方墳と推定されるが、断定はできない。しかし、遺物のセット状況や木棺直券である点などを考慮すると、松江市馬渕町所在の観音寺2号墳〈方墳〉(注1)などに類例が求められ、また、丁之内古墳から少し西方の多伎町口田儀の経塚山古墳群(注2)にも方墳が存在することからみても、古墳時代中期の方墳の可能性が強いと思われる。

斐伊川以西の出雲平野にあっては、大念寺古墳、上塙治築山古墳に代表される壮大な横穴式石室を有する後期古墳のイメージが強過ぎるが、古式の大寺古墳が北山山麓にあり、そして丁之内古墳が所在する東神西町から湖陵町、多伎町にかけての西部出雲平野の周辺部に中期の小規模古墳が点綴している様相は、華々しい飛躍をとげる後期古墳文化への導火線として、今後ますます注意しておかねばならない地域といえる。(川上 稔)

注1. 門脇俊彦「松江・観音寺古墳群」(『島根県埋蔵文化財調査報告』第IV集、島根県教育委員会、1972)

注2. 『さんいん古代史の周辺〈中〉』(山陰中央新報社、1979)
山本 清『山陰古墳文化の研究』(1971)



丁之内古墳遠景（北から）



丁之内古墳主体部と鉄剣の出土状況（西から）



丁之内古墳出土の鐵劍



100mm
1 2 3 4 5

丁之内古墳出土の鐵劍（縄布の付着状況）



丁之内古墳出土の鐵劍

V 古壙内遺跡の発掘調査

1. 調査の経過

2. 遺構

3. 遺物

4. 小結

1. 調査の経緯

昭和56年1月7日に $1.5 \times 6\text{ m}$ のトレンチを設定して試掘調査を実施した結果、西端部で上層状の落ち込みを確認したため、発掘調査をすることになった地点である。発掘調査は1月28日に開始して、2月16日に完了した。以下、日を追って概述する。

1月28日（水）

丁之内古墳の調査と併行して古墳内遺跡の調査も行なうことにして、立木伐採と下草の除去を手懸ける。

2月2日（月）

試掘調査で確認した土壌状の落ち込みを中心として地形調査測量を開始する。 25cm コンターデ実施した

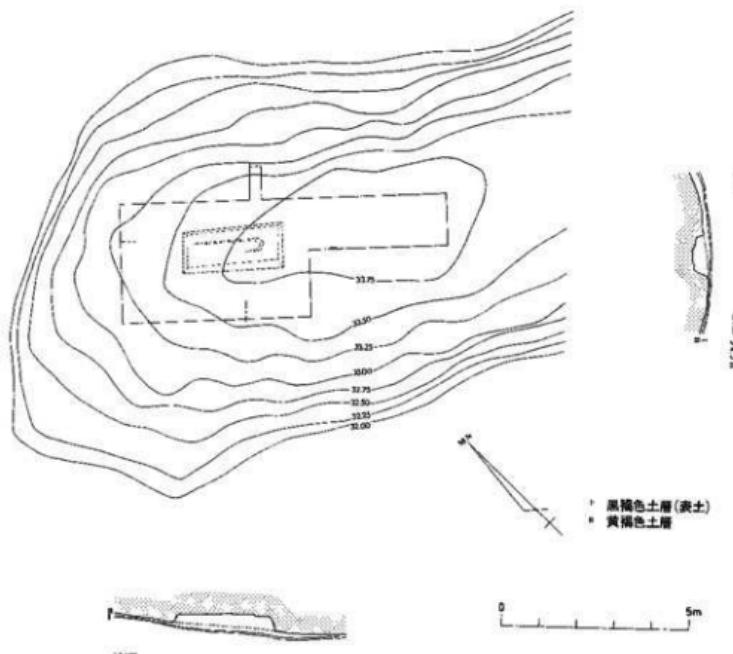


図10 古墳内遺跡 地形・造構測量図

2月5日（木）

土壙を中心にして十字にセクション・ベルトを設定し、他の部分を掘り下げた。土壙プランが概ね長方形を呈することを確認した。

2月6日（金）

セクション図を作製し、セクション・ベルトを削土する。

2月7日（土）

土壙内の発掘に着手する。土壙東側壁近くで砥石と鉈が出上した。土壙は、長径2.9m 短径1.1mの長方形を呈し、深さが50cm程度の大きさであることが判明した。

2月10日（火）

土壙の造構図、土壙と発掘区域の実測を実施する。

2月16日（月）

遺跡の写真撮影を行ない、発掘の全日程を終了した。

2. 遺 構

古墳内遺跡は、間谷西遺跡と丁之内古墳のほぼ中間の標高34m地点に位置し、南から伸びる尾根が北と西に分岐する地点に存在する。その辺りは、東西にのびる尾根上に幅5mくらいの平坦地が細く繋がっており、その西寄りの中央部に尾根の方向に主軸をもつ土壙1基が掘られている。

遺構としては、土壙1基のみである。土壙の上面は、長径2.95m、短径1.15mを測り、下底はそれぞれ2.5mと0.9mの規模を有する。平面プランは長方形を呈し、墻幅は西端が僅かに狭くなっているが、墻底は同一幅を保っている。土壙の深さは、南隅部から推定して本來は0.5mはあったと思われるが、北側では、残存0.2m程度と浅い。南壁の立ちあがりは、深さが一番深い北壁が最も急で、西壁が45度で最も緩くなっている。南壁と東壁はほぼ同じで60度くらいの傾斜である。

土壙の構造で注意しておきたいのは、墻底に幅0.35m、長さ1.9mにわたって深さ5cm程度掘り深めていることである。これは本棺を墻底に安置するための措置と思われる。

土壙の上面は表土から10~15cmと浅く、黒褐色土層（表土）・黄褐色土層を挟在する。遺物は全て土壙内から出土した。出土遺物は、鉈1本、砥石2丁で、土器類は全く出土しなかった。出土位置は、土壙東側中央部に集中していた。

3. 遺 物

出土した遺物は、砥石2丁（孰れも半欠品）と鉈1本であり、土壙の東端部に一括にされていた。土壙東壁から10cm離れた位置に墻底から15cm浮いた状態で検出された。

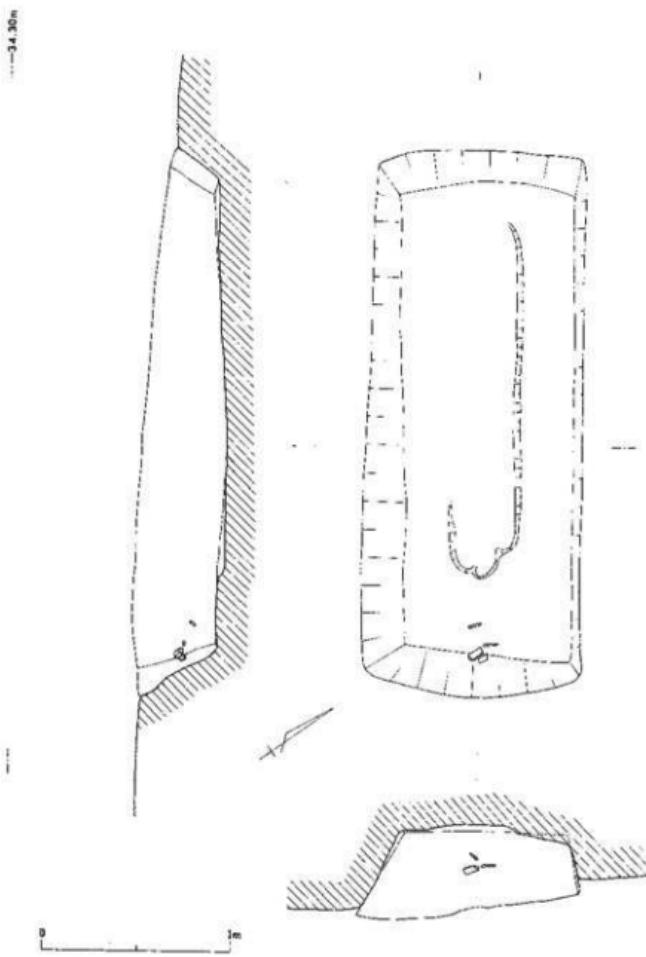


图11 古坝内遗迹遗構実測図

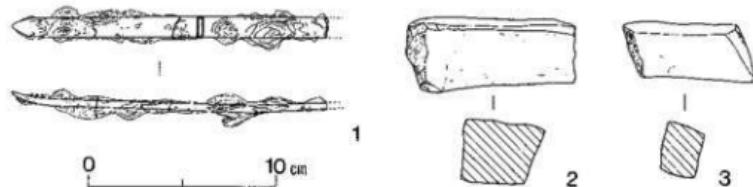


図12 古墳内遺跡出土遺物実測図（1 鍔、2・3 砥石）

鍔（図12-1）二箇所で折れているほか茎端基部が欠失した鉄製品で、残存長16.5cm幅1.1cmを測る。鍔がひどいが、刃部の鎋が僅かに認められる。刃先は鋭く反りをもち、茎部の幅は一定し、断面は長方形である。

砥石1（図12-2）長径9cm、短径は端部で4cm、中央部が3cmの砥石である。半欠品であるが、復元長は14cm程度と思われる。四面が砥石として使用されており、うち一面には、幅1.5cmの凹溝が中央部に走る。石材は、流紋岩で固くて緻密な岩質であるが、その磨耗程度からみて長期にわたって使用された形跡が窺われ、仕上げ砥石として使用されたと思われる。

砥石2（図12-3）長径6cm、短径3cmの半欠品である。完成品の中央部と思われるが、両端を欠いていて全体の大きさは不明である。砥石1とくらべるとかなり肉薄となっていて、砥石としての使用面は表裏の2面であったと思われる。石材は砥石1と同じく流紋岩である。

4. 小 結

遺構は平坦面に掘られた土壙1基で、出土遺物も鍔と砥石だけという貧弱なものだった。丁之内古墳と同じく、上壙及びその周辺からの土器の出土を欠いているので明確な時期決定は難しい。土壙の規模や上壙に付帯する外部施設が見当らないことからみると古墳時代前期の可能性が強いが、他方、遺物から推すと、鍔は古墳時代を通して使用されているし、砥石はどちらかというと古墳時代全期に通例のもののように見受けられるので、平坦面の広さには問題があるが、本来は墳丘をもった小規模古墳の内部主体であった可能性もあり、即断は出来ない。

ところで、遺物は土壙の東側にあったが、砥石2丁は孰れも半欠品であるうえに鍔も茎の基部を欠失したもので、副葬するには粗末なものであり、さらには、供獻用の土器も欠いている。また、砥石は明らかに相当長期に亘って使用した痕跡が認められ、砥石の一面にある幅1.5cmの凹溝は鍔を研いだものであろうが、それ以外はもっと幅広いものを磨いており、他の鉄製品の存在を示唆している。それがどんな鉄製品であるかは判らないが、少

なくとも土壙の内外からは発見できなかった。

孰れにしても、遺物において上器が皆無で砾石と鈍のしかも半欠品という副葬パターンは通有のものではなく、この遺構の時期問題とともに注意をはらう必要がある。

なお、出雲平野には同種の遺構が他に存在することも推定されるので、今後の開発等にあたっては十分に考慮する必要があろう。(川上 稔)



古墳内遺跡の主体部（東から、手前は磁石）



1



2



3

古墳内遺跡出土の遺物（1.鉈、2・3磁石）

昭和56年3月15日 印刷

昭和56年3月25日 発行

出雲車両基地建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 出雲市教育委員会

印刷 株式会社 武永印刷